

## 序

著者	小長谷 有紀
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	111
ページ	1-3
発行年	2013-03-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008881">http://hdl.handle.net/10502/00008881</a>

## 序

小長谷有紀

本書は、梅棹忠夫が1944年9月から1945年2月にかけて、張家口にあった西北研究所から「草原行」と称して今西錦司所長らとともに草原へ調査に出かけたさいにのしたスケッチの原画集である。調査概要については『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』(2011年、千里文化財団)を参照されたい。

これらのスケッチの大部分は、梅棹忠夫著作集の第2巻『モンゴル研究』(1990年、中央公論社)を編むさいに書きおこされた「モンゴル遊牧図譜」において、作図されて図版として所収された。当該「図譜」は、のちに『回想のモンゴル』(1991年、中央公論社)にも所収された。

著作集の編集時、すでに視力をうしなっていた梅棹が、半世紀もまえにえがいたスケッチに対して解説をつけることができたのは、スケッチにおおくの書きこみがあって、それらの情報からさまざまなことがおもいだされたからである。いいかえれば、スケッチの原画にふくまれていた諸情報のうち、文字情報は解説文のテキストの根幹をなし、視覚情報は製図に転換された。そのように情報が分断された結果、残念なことに、原画のもつ魅力そのものはむしろうしなわれたといえよう。

2010年7月の没後に企画され、2011年3月から開始された特別展「ウメサオタダオ展」では、内モンゴル調査の足跡をしめすために、これらの原画も展示された。その精細さは、一般入館者の耳目をあつめた。また、偶然に本館をおとずれたモンゴル人研究者たちからは、1940年代の暮らしを詳細にえがいていて貴重な歴史的記録となっており、国際的な共同研究をするにふさわしい、という指摘をうけた。

そこで、まず、こうした資料の保存活用をめぐって、2011年10月から2年半の予定で共同研究「梅棹忠夫モンゴル調査資料の学術的利用」を開始し、国内の研究体制をつくった。さらに、2012年2月に日本科学未来館において、財団法人国際文化交流協会の助成をうけて国際シンポジウム「アーカイブズの未来：梅棹忠夫モンゴル資料の学術的利用から考える」をひらいた。当該シンポジウムでは、モンゴル国および中国内モンゴル自治区からまねいた民族学ならびに民俗学の研究者たちが、現在の物質文化との比較について報告し、地域差と時間差をあきらかにしようところろみた。

このシンポジウムを契機として、内モンゴル大学と国立民族学博物館とのあいだで2009年に締結された学術交流協定のもとで、2012年5月に具体的な共同研究に関する協定をあらためて締結した。現在、内モンゴルで実際に利用されている、あるいは博物館で保管されている物質文化と照合する作業を実施し、共同研究を国際的に推進して、本書のようなかたちにまとめることができた。

本書の作成にあたっては、おおくの研究者が分担参加している。

内モンゴル大学では、チムドルジ教授が副学長として、ナサンバヤル教授とともにプロジェクトを総括した。トゥグスバヤル教授は上述のシンポジウムに参加し、資料の意義について報告した。ナランゲレル教授は、事前調査を実施するとともに筆者らの調査に同行した。周太平教授は、日本語解説文を校閲した。調査行の地図を作成したのは楊常宝助手である。

また、中央民族大学（北京）のサランゲレル教授および大学院生ホビスガルトさんには、モンゴル語の索引を作成するにあたって協力をあおいだ。さらにまた、内モンゴル民族大学（通遼）の秋喜教授には、現在もわずかに季節移動をしているジャロート旗ならびに東ウジムチン旗での実態調査に関して協力をあおいだ。

日本からは、筆者のほか、総合研究大学院大学の大学院生、堀田あゆみさんが撮影ならびに聞き取り調査にあたった。また、共同研究のメンバーとして富山大学の呉人恵教授および上述のナランゲレル教授がモンゴル語の索引を校閲した。なお、モンゴル語の校閲にはナムジルマ（1988）およびノルジン（1997）などを参照した。こうした研究者たちの協力によって本書ははじめてできあがったことをしるしておきたい。

1945年から46年にかけてえがかれたスケッチの大部分は、張家口から近いチャハル盟と、砂丘を越えた平原部にある東スニト旗、とりわけ東スニト旗内のベーリン・スム（貝勒廟）でえがかれている。現在、後者の地にはスニト博物館があり、その館長ゾリクトバートル氏はじめ、地元の人びとに感謝し、地元の人びとに本書をささげる次第である。貴重な資料をのこした梅棹忠夫自身が、生きていればそのぞむにちがいない。

なお、本書であつかう資料は、現在、国立民族学博物館内の梅棹資料室で「梅棹アーカイブズ」として保管されており、登録作業がすすめられている。まだ、登録番号が付されていないため、すでに公開された刊行物を利用しながら整理している。

最後になったが、梅棹アーカイブズの資料整理にあたっている三原喜久子さんと明星恭子さんには、今回もひとかたならぬご尽力をたまわったことを記してお礼もうしあげる。

## 注

- 1) 本書での原画の掲載順は、「モンゴル遊牧図譜」にしたがった。項目の番号は、「モンゴル遊牧図譜」の図の番号に対応している。
- 2) 本書で原画に付した本文は、「モンゴル遊牧図譜」の記述を転載した。「モンゴル遊牧図譜」では、項目ごとの解説があり、そのなかに複数の図がふくまれていることもある。そのような場合、本書では図を中心にあつかうため、解説を図ごとに分解して転載した。分割によって生じた項目についてはあらためて項目名をあたえた。

- 3) 「モンゴル遊牧図譜」で別項を参照するように記されていた場合は、当該の論文にもちいられた原画を本書に収録し、別途、番号を付した。そして、当該論文から一部転載して本文とした。ただし、モンゴル語のローマ字表記については省略した。注6参照。
- 4) 著作集の編集時に、すでに梅棹自身によって製図されていたものも、原画とみなしている。著作集の編集時に利用されなかった情報や生じたあやまりなどについては、注でしめた。
- 5) フィールド・ノートに同様の図解説明がしるされている場合については、注にしめた。フィールド・ノートの番号およびページ数もしくは日付は、梅棹自身の記載にもとづいている。
- 6) 原画にしるされているモンゴル語のうち、モノの名まえについては、現在の内モンゴル標準語で索引を作成して末尾に付した。索引のモンゴル語のローマ字転写は、小澤（1994）にしたがう。すなわち、4つの円唇母音 ouöü を区別するが、第2音節以下では uü に統一する。k/g と q/γ を区別する。γ は G で記す。「モンゴル遊牧図譜」では、原画にしるされていたモンゴル語で ou および öü の区別がないことをうけて4つの円唇母音を2種類 ou と öü にわけ、それぞれ o と u に対応させて標記し、また第2音節以下で弱くなっている母音や長母音にはそれぞれ「~」と「-」の記号をくわえてあらわしておいた。本書の本文ではカタカナ表記にとどめるので、発音やつづり方については、索引を参照されたい。確認できなかった単語には「？」を付して索引にいれた。

## 文 献

小澤重男

1994 『現代モンゴル語辞典（改訂増補版）』大学書林。

小長谷有紀

2012 「梅棹忠夫のモンゴル調査におけるスケッチ資料」『国立民族学博物館研究報告』37巻1号，91-122ページ。

那木吉拉瑪（整理）

1988 『二十八卷本辞典』内蒙古人民出版社。

諾爾金（主編）

1997 『蒙古語辞典』内蒙古人民出版社。